



Weekly Market Report

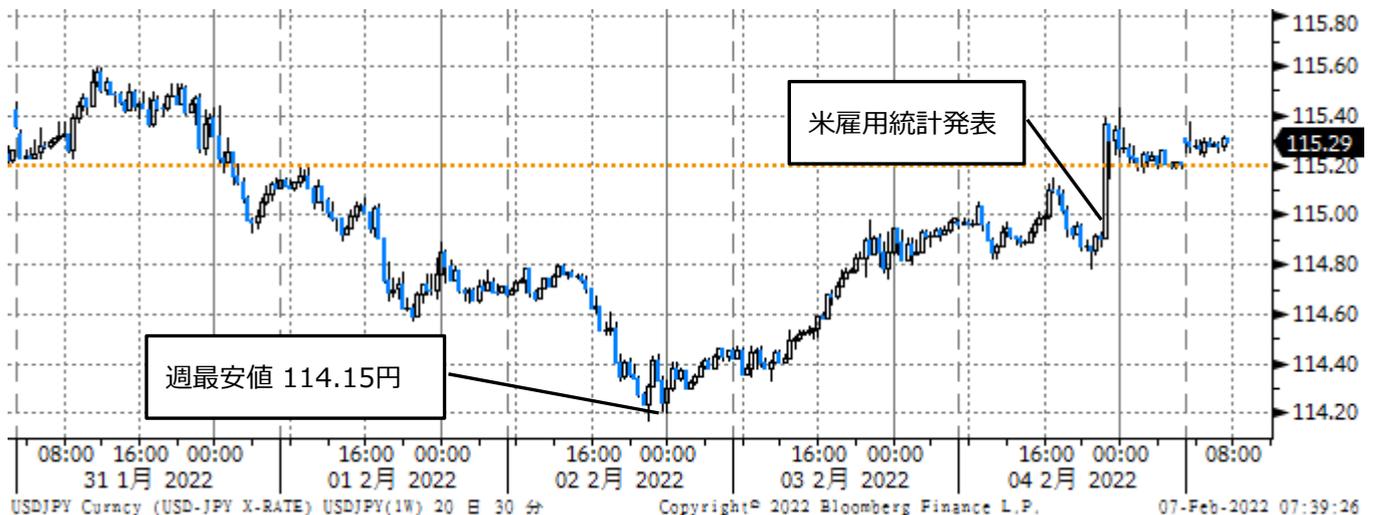
Feb 7, 2022

FX, JPY Interest Rate, Topics

1. 為替相場概況

予想外の米雇用統計によりドル高基調の到来か

USD/JPY (1週間の値動き)



(出所) Bloomberg

コメント

週前半のドル円相場は、米国株式の不安定な値動きやADP雇用統計等の事前予想を下回る経済指標結果を受け、ドルが売られ2日には週最安値となる114.15円を示現する等、週央にかけて円高進行する展開となった。しかし、心理的節目である114円は割れず、週後半にかけては3日BOEによる0.25%の利上げやECB開催後ラガルド総裁の記者会見においてタカ派的な発言が目立ったこと等から、米金利が上昇（米10年債利回り1.7%台後半⇒1.8%台半ば）し、ドル円相場も114円台後半まで反発。更に4日に発表された米雇用統計が予想外に強い結果（NFP：結果+46.7万人、事前予想+15.0万人）等を受け、米10年債利回りは1.9%台まで急騰し、ドル円は115円台を回復、115.19円で越週となった。今週は、前週末の流れを引き継ぎドル高の展開になると予想。前週末の米雇用統計結果よりNFPの増加に加えて、平均時給の伸びが確認される等、米国のインフレ継続懸念は強まっていることから、経済指標として今週発表予定の米CPI結果は特に注視したい。（市場営業部/梅村）

今週の経済指標 (予定)

日付	イベント	予想
2/7(月)	(欧州) ラガルド総裁発言	
2/8(火)	(日本) 貿易収支	-2,140億円
2/10(木)	(米国) 米CPI (前年同月比)	7.3%
2/10(木)	(米国) 米CPIコア指数 (同上)	5.9%
2/11(金)	(米国) ミシガン大学消費者態度指数	67.5

USD/JPY (5年間)



(出所) Bloomberg

今週のレンジ予想 (USD/JPY)

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
嵯峨大輝	114.50 - 116.30	先週の米雇用統計により米金利が上昇している中、今週は米CPIが控えており、引き続き底堅い展開が続くと予想。
三原大希	114.40 - 116.10	原油高が続いている中、米CPIは強い結果が予想され、結果発表後のアップサイドリスクに警戒が必要と考える。

2. 円金利相場概況

先週の円金利は6年ぶり高水準をつける展開。今週は米消費者物価指数に注目。

10年国債金利と債券先物（1週間の値動き）

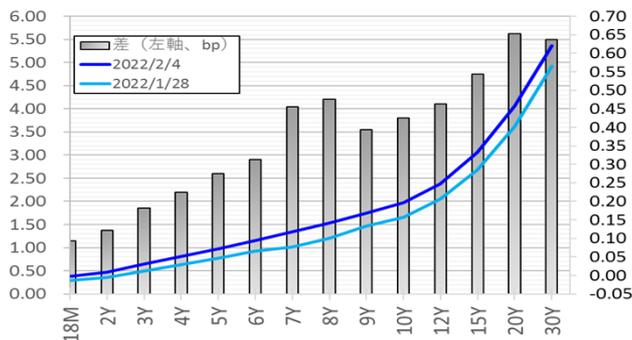


コメント

先週の10年国債利回りは、当初は0.17%～0.18%の狭いレンジ内で推移するも、過後半にかけて上昇する展開となった。週前半は日銀の金融政策の正常化をめぐる思惑から小幅に上昇してスタート。その後1日の10年債入札が良好な結果となり、金利が低下する場面も見られた。週央にかけては米金利上昇に対する一服感、30年債入札が無難な結果になったことから小幅な動きで推移。過後半は、英中銀、ECBのタカ派な内容を受けて海外金利が上昇。これらにつられる形で、一時6年ぶりとなる0.20%まで上昇して越週。今週の円金利は、先週発表された米雇用統計を受けて上昇している米金利につられる展開を予想。また、10日には米消費者物価指数が控えており、各国中央銀行がインフレを懸念し、利上げに動き出している中、金利にどのような影響を与えるか注目。（市場営業部/嗟峨）

金利スワップ変化（1週間）

(%)



10年円金利スワップ推移（5年間）

(%)



今週のレンジ予想（10年国債利回り）

(出所) Bloomberg

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
内田直樹	0.17% - 0.23%	米雇用統計を受けた海外金利上昇の影響をどこまで織り込むかがポイント。日銀のけん制がどのタイミングで入るかに注目。
加藤祐樹	0.15% - 0.22%	金利上昇を懸念した、日銀による「指値オペ」に警戒が必要。また、10日発表の米消費者物価指数にも注視したい。

3. 今週のトピックス

カナダドル相場動向

政策金利の引上げ期待からカナダドル相場は堅調な展開か

<カナダの金融政策と経済状況>

2/27に行われたカナダ銀行（中央銀行：BOC）の金融政策会合では、政策金利の引上げを見込む市場参加者が多かったものの、結果的に利上げは見送られた。ただし、金融政策スタンスは従来よりも引き締め方向に大きく変化しており、BOCのマックレム総裁も「今回の利上げ見送りは新型コロナオミクロン株の感染拡大に配慮したもので、インフレを鎮静化するために政策金利の引き上げは必要。」として、近いうちに利上げが行われることを示唆している。市場では2022年中に6回程度の利上げが予想されている。

カナダ経済については、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で2020年の実質GDP成長率は-5.23%に落ち込んだが、BOCの予測では2021年は+4.6%、2022年+4.0%と順調に回復していく見通しだ。2021年11月のGDP成長率も前年比+3.8%と予想を上回る結果となっており【図表1】、世界有数の資源大国であるカナダは、資源価格の上昇が輸出の拡大による経済成長につながっている。

CPIについても上昇が続いている。2022年1月に発表されたCPIは前年比+4.8%と1991年以来の高い伸びとなり、エネルギーと食料品を除いたコア指数も+3.4%と2003年以来の高水準となった。BOCの予測では、2023年にはインフレの高騰が落ち着いてくる見込みであるが、今後のインフレ動向はBOCの利上げペースに大きく影響しそうだ。

<当面のカナダドル相場見通し>

当面のカナダドル相場については堅調な展開が予想される。BOCは3月にも利上げを開始する可能性が高く、カナダ国債の金利も10年もので1.8%台まで上昇しているため、強い金融引き締めスタンスを受けたカナダドルの買い圧力は継続しそうだ【図表2】。

また、カナダはオイルサンドの形で大量の原油を埋蔵していることから、カナダドルは原油価格との相関が高い通貨であり、上昇基調が続いている原油相場もカナダドルの後押し材料となってくる。原油高の背景としては、新型コロナオミクロン株の感染拡大による悪影響が限定的とみられる中、OPECプラスが増産幅の拡大に動かないことやウクライナ情勢への懸念による供給不安が挙げられるが、原油相場の先行きについては、国際エネルギー機関（IEA）が2022年後半にかけて供給が需要を上回るとの見方を示していることもあり、原油価格の上昇が一服した場合には、カナダドルの上値抑制要因となってくるだろう。

カナダドル相場の当面のレンジとしては、対円では昨年高値の93.02円を上値ターゲットとした88.00-93.00円、対ドルでは200日移動平均の1.25を節目とした1.2500-1.3000を想定している【図表3】。

（チーフ・マーケット・ストラテジスト／諸我）

【図表1】カナダのGDP成長率とCPI (%)



(出所: Bloomberg)

【図表2】カナダの政策金利と2年、10年金利 (%)



(出所: Bloomberg)

【図表3】カナダドルの対円、対ドル相場



(出所: Bloomberg)

ご留意事項

- ・本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の申し込みでも、取引締結の推奨でもなく、売買若しくは何らかの取引を行うことを助言したり、または勧誘したりするものではありません。
- ・本資料の内容につき、当行はその正確性及び完全性を保証するものではなく、一切の責任を負いません。ご利用に際しては、ご自身のご判断をお願いします。
- ・本資料に基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失等については、当行は一切責任を負いません。
- ・本資料は著作物であり、著作権法により保護されております。無断で本資料の全部または一部を複製、送信、転載、譲渡および配布することはできません。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも当行の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。



商号：株式会社あおぞら銀行（登録金融機関 関東財務局長（登金）第8号）
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人金融先物取引業協会、日本商品先物取引協会